

中国・シヨ人(畬族)の生業戦略にみる伝統と現代

浙江省麗水市老竹畬族自治鎮黄桂行政村を中心に

第13章

菅 豊

1. 問題の所在

本章では、中国の少数民族シヨ人*を対象とし、現代における伝統的生計戦略の維持と変化の様相について考察する。中国は1978年の中国共産党11期3中全会における決議以降、「改革・開放」政策へと転換がなされ、農村改革、社会主義市場経済の導入など、さまざまな改革が推進されている。そのような状況のなか、かつて旧社会から「解放」された以降、共同化、集団化という驚くべき画一制度によって大きな変化をとげてきたのとは異質の変化を、中国の人々の生計活動は被っている。

この大変革期にあって、人々の生きるための生計戦略はどのようにかわり、あるいはどのようにかわっていないのであろうか。現代化、あるいは「改革・開放」政策、それにともなう市場経済の浸透が、どの程度、農村社会の生業に影響を与えているのであろうか。このような問題を、シヨ人の生計戦略のなかで検討する。

*本章で「シヨ人」と表記するのは、中国広東省や福建省から浙江省にかけた山岳部に居住する少数民族で、漢字では畬族と表現される。日本では「シェ族」、「シェー族」、「シヨオ族」という表記をすることもある。

ここで取り上げるシヨ人は「解放」以前より、漢人との交流が深く、経済生活の面に限らず、多くの側面で漢化がいちじるしい(瀬川, 1990: 74-85)。しかし、ほとんど漢人とは差のない生活のなかにも、彼らが伝承的に受け継いできたと認識する活動、技術、知識は存在する。それが、オリジンとして漢人の技術、知識に由来するものであったとしても、現在、それはすでに彼らの生活の一部となっているのであり、存在、あるいは継続する価値を有しているのである。本章では、そのような継承された生業の現在的意義を抽出するために、シヨ人が行なう家禽・家畜飼育を題材にする。

この家禽・家畜飼育は、彼らの経済生活のマジョリティーを占めるような、いわゆる「本業」ではない。しかし、「副業」として意識化され、現実生産の周縁的な部分を占めるがゆえに、個人の意図や自発的創意が、むしろ反映されやすくなっている。それには彼ら自身の「改革・開放」以後の、生業に対する考え方が、より強く反映しているのである。その意味で、国家政策に強く管理されやすいメジャーな生業に比べ、在地の自発的な論理を抽出しやすく、人々の内発的な戦略を考察するにあたり有効な題材であるといえる。

2. 黄桂行政村シヨ人の経済状況とその構造

本章で対象とする黄桂^{ホアングォイ}行政村は、現在、浙江省麗水市老竹鎮^{ラオヂョウ}に属する(図13.1)。老竹鎮は、麗水市区の西端に位置(北緯28°30′, 東経119°44′)し、人口約1万4000人、そのうち約5%をシヨ人が占める自治鎮である。この老竹鎮の北部、武義県との境界をなす山岳部に黄桂行政村がある。黄桂行政村は、上井村^{シャンジン}、平坑村、高水尖村、横塘村、黄桂村^{ホアングォイ}*の5自然村からなり、1997年時点で戸数202戸、人口705人である。大半が雷、藍、鐘姓のシヨ人で、周姓などの漢人が少数ながら居住する(写真13.1)。

シヨ人は浙江、福建、広東、江西、安徽の5省に居住する少数民族である。本来、山岳地に依拠した「刀耕火種」とよばれる焼畑と、狩猟を生業の基盤

*本章では、自然村は地名の後に「～村」、行政村は「～行政村」と表記する。

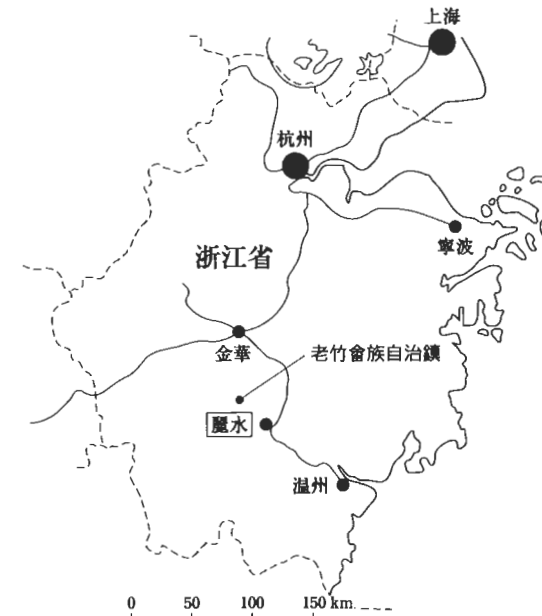


図13.1 調査地の位置(福田, 1999: 1をもとに作図)



写真13.1 老竹畲族自治鎮黄桂村

とすると一般に考えられてきたが(鐘, 1987: 266-277; 施, 1988: 63-67; 藍, 1995: 59-61), 現在の黄桂行政村においては, 焼畑, 狩猟などその民族性を示す生業は, すでにほとんど行なわれていない。その生業の基盤は, 稲作を中心とした農耕にあり, 周辺の漢人と生産生活面において大きな差はない(藍, 1995: 66)。家禽・家畜飼育に関しても, 早くより漢人との交流により, その独自性は失われている。

黄桂行政村域の「解放」前の家畜飼育は, 現在と同じく個別的, 小規模なものであった。たとえば, 「解放」時には, 地主, 富農, 富裕中農, 下中農, 貧農の5成分に区分されたというが, プタは富裕中農, 下中農で1戸に1-2頭ほど, 地主, 富農で3-4頭飼育していたという。そのほとんどは, 換金用で, 自家で肉を消費することなど, 地主や富農層以外ではほとんどなかった。そのころに比べてはるかに消費量は増えたが, 現在でも家禽・家畜の肉や卵は, ふだん頻繁に食べるような食材の地位を占めるに至っていない。

以下, 黄桂行政村の現在の経済状況について, 統計資料*をもとに検討してみよう。

黄桂行政村には, 村民委員会が1組織, その下部組織として村民小組が9組組分けられている。電気普及率は100%で, 上水道普及率は約95%, テレビも102の家庭に普及している(『1997年農村基本情況』による)。耕地面積は水田683畝(1畝=6.667a), 畑作地77畝で計760畝, その他山林3551畝(『1997年耕地面積』による)である。全人口705人中約37%, 263人(うち16歳から59歳までの男性205人, 16歳から54歳の女性58人)が「労働力

*この行政村の統計を管理, 集計するのは行政村の会計L.L.氏(1932年生まれ, シヨ人, 男性)である。彼は, 1953年から統計作成にかかわっていたが, 正式に会計の職についたのは1963年からである。彼は, 毎年12月20日までに村内の統計資料をとりまとめ, 鎮政府へと報告してきた。彼は最初に統計とかかわった1953年の数値を若干記憶している。当時は, 戸数119戸で, 人口565人(うち約280人がシヨ人)。この村は, 977.45畝の耕地面積をすでにもっており, その面積は現在より広い。彼は, 政府によって決められた経済, 社会に関する統計を集計している。その数値の正確性には, いささか疑問もあるが, 基本的に彼はこの数値は歪められていないという。ただし, 平均収入については, 若干高め報告しているようである。報告値の年間平均所得は2150元であるが, 実際は1750元にしかないという。

資源」として計算され, その内訳は農業201人(約76.4%), 牧畜業12人(約4.5%), 林業1人(約0.4%), 漁業2人(約0.4%), 通信・交通運輸業5人(約1.9%), 商業5人(約1.9%), その他37人(約14.5%)であり, 大部分の労働力が農業生産に配置されているといえる(『1997年農村労働力資源および主要行業分布情況』による)。しかし, 農業従事者として計算される人々は, 実際には自家でブタやニワトリなどの家禽・家畜飼育を行ったり, 山林の木材伐採に従事したりしており, 統計上にあらわれるような専門化は大きく進んでいない。

長期, 外部へ流失している「臨時工」は37人, 短期の出稼ぎ「外出労働力」は18人(うち省外6人)であり, 村外に働きに出ている人口は, 村の全人口の約7%, 全労働力の約21%にあたる。

表13.1は, 黄桂行政村における1997年農作物の作付面積と, 1畝あたりの生産量, 全生産量をまとめたものである。黄桂行政村では, 耕地における粮食作物の作付面積は1500畝, 非粮食作物は485畝, 合計1985畝で, 耕地面積760畝に対する作付面積比は約2.6倍である。つまり, 作物の栽培季節, 期間のずれを利用して, 全耕地を1年間に2.6回使用しているということになる。

非粮食作物が全作付面積に占める割合は, 約24%である。粮食作物はイネ, 麦, 雑穀など主食物作物として位置づけられる穀物であり, これは食糧生産政策・契約買付制度の影響下にあるのに対し, 非粮食作物は主として換金を目的として市場に対応した作物である。この割合は, 社会主義市場経済導入後, 徐々に増加しつつあるという。しかし, 現状として作付けの主たる作物は, 作付面積のみならず全作付面積の約53%を占めるイネであり, 黄桂行政村の農業生産は, 現在においてもイネを中心とした穀物生産に比重がかけられていると, 統計的には理解することができる。ところが, 収益面から検討すると, そのような穀物中心の生産から, 商品性の高い産物生産へ変化しつつあることが理解できる。これは, 「改革・開放」以後の市場経済の影響によるものと考えられる。

表13.2は, 黄桂行政村の1997年の総収入, 総支出をまとめたものである。

表 13.1 黄桂行政村の1997年農作物の作付面積と、1畝あたりの生産量、全生産量
 (『1997年農作物播種面積と産量』および『1997年茶葉と果樹生産状況』をもとに作成)

作物名	播種面積	畝産	産量
粮食作物			
【春季生産の粮食作物】			
小麦	65	105	6.8
エンドウマメ	55	45	2.5
ジャガイモ	165	140	23.1
イネ(早稲)	485	395	192.0
*そのうちハイブリッド米	160	420	67.0
【秋季生産の粮食作物】			
イネ(単作, すべてハイブリッド米)	50	420	21.0
イネ(連作晩稲)	520	400	208.0
*そのうちハイブリッド米	500	410	205.0
サツマイモ	45	800	36.0
ダイズ	115	150	17.2
非粮食作物			
【水田, 畑など耕地で栽培するもの】			
ナタネ	120	80	9.6
その他の野菜	185	1250	231.0
スイカ	180	622	112.0
【山地, 果樹園など耕地外で栽培するもの】			
シイタケ	—	—	200.0
茶	5	—	15.0
			(そのうち春茶10, 夏茶5)
ミカン	110	3681	405.0
モモ	5	—	—

播種面積は作付面積: 単位は畝(1畝=6.667a)

畝産は1畝面積あたりの生産量: 単位は公斤(1公斤=1kg)

産量は全生産量: 単位は噸(1噸=1t)

粮食作物はイネ, 麦, 雑穀など食用用穀物の総称

総額 209 万 3200 元(1997年時点 1元=約 15 円)の生産をあげるが, そのうち約 58%は農業生産によるものである。その農業生産のうち, 約 55%は市場に対応した売却用の産品である。つまり, 作付面積では政府買い上げの穀物生産に比重がかけられているものの, 農業収益の面からいうと, 市場対応型の経済作物生産が大きな意味をもっているといえる。牧畜業による収入が

表 13.2 黄桂行政村の農村経済総収入と総支出(万元)(『1997年農村経済収益分配状況統計表』をもとに作成)

[総収入]	
項目	収入
農業	121.00
・栽培農業	113.00
	(そのうち一般市場への売却用産品 67.00)
・その他農業	8.00
林業	10.32
	(そのうち一般市場への売却用産品 0.32)
牧畜業	31.00
運輸業	2.00
商飲業	4.00
サービス業	21.00
農村外労働収入	20.00(村外出稼ぎを含む)
総計	209.32
[総支出]	
項目	支出
生産にかかる費用	42.00
・栽培農業	28.00
・林業, 牧畜業, 漁業	4.00
・その他	10.00
管理にかかる費用	4.60
その他	0.32
国家税金	8.00
・農業税	4.50
・農業特産税	3.50
その他税金	2.58
・村控除分	0.92
	(積立金, 公益事業費, 幹部報酬など)
・郷控除分	1.66
	(学校, 計画生育, 軍への特別慰問金, 郷村道修理工費など)
総計	57.50

農業収益について約 15%を占めるが, これも市場への売却を主たる目的とした産品であり, 現在の黄桂行政村は収入の基盤を市場経済にかなりゆだねていることが理解される。黄桂行政村の総収入と総支出の差, つまり純益は

151万8200円で、人口1人あたりの年収は約2150元*である(『1997年農村経済収益分配状況統計表』による)。

このような生産活動の経営は、個人の裁量にゆだねられた「家庭経済」がほとんどで、集団的な「村組集体」の経営は現在では0.5%にも満たない。耕地の「承包」率(生産責任(生産請負)の率)は100%で、生産責任制のもとで経済の個人化は進展している(『1997年農業承包経営責任制状況統計表』および『1997年農業承包合同状況統計表』による)。

以上のように、現在の黄桂行政村の農業は、「解放」前のような山間地の焼畑と、集落周辺部の耕作地に依拠する形態から大きくかわっている。そして、その生産形態は現在でも、外部的な市場経済に対応して明らかに変化しつつある。この変化は、家禽・家畜飼育の方面にも大きく影響を与えている。

黄桂行政村では、ショ語で農作物をオンフォ(黄貨：農作物)*2とよぶのに対し、家畜をタオサン(？：家畜)とよぶ。タオサンとしては、ジー(猪：ブタ)、ノウ(牛：ウシ)、ヨン(羊：ヒツジ、ここではヤギ)などとともに、ガイ(鶏：ニワトリ)、アオ(鴨：アヒル)、ガオ(鵝：ガチョウ)など家禽も含む。

「解放」前から、生産大隊時代を通じて、これらの家禽・家畜飼育は行なわれていたが、現在のように収益として大きな意味を認識され始めたのは、改革・開放以後のことである。ブタの飼育を例にあげれば、「解放」前でも下中農レベルまで飼育は行なわれ、ほとんどが売却され収益はあげられていたものの、それを生業の中心とすることはなかった。自家消費も、ほとんどが春節などの祭事に限定されていたという。

1997年のブタの「年末存欄総頭数(年末に存在する総頭数、当歳の子ブタ

*実際に純益151万8200元を、人口705人で割ると約2153元となり、統計上の数字と3元誤差がある。

*2本章では、現地発音の聞きなしをカタカナで表記し、さらにその後ろの括弧内に(彼らが意識する漢字表記：日本語の意味)を付している。表記不詳の場合は「？」をつける。この地域のショ人は、日常的には麗水方言とショ語とされる言語の両方を用いて会話する。このショ語とされる言語には、独自の語彙もみられるが、客家語的な特色の濃厚なものも多数みうけられる(矢放、1999：213-214)。ショ人は、言語的には、その人口の99%が、漢語の客家方言を用いているという(施、1988：21)。

も含む)は432頭で、年内に生産売却されたブタの頭数「出欄」298頭をあわせても全生産数は730頭(うち繁殖用メスは18頭)である。1戸あたりの頭数は単純計算約3.6頭で、現在でも経営頭数は特別拡大していない。現在、一部飼育頭数を増やした家も散見できるが、ほとんどの家は1-2頭を小規模に戸別飼育する形態のままである。経済的には、みこみがあると認識されているものの、さほど極端な増加は示していない。

ヤギの「年末存欄」はわずかに2頭(すべてメス)にすぎない。ウシは「年末存欄」51頭で、黄牛36頭(うちメス10頭)、スイギュウ15頭(うちメス6頭)である。ウシは農耕用の役牛で、田を耕すことのできる「能耕牛」は34頭。ニワトリ、アヒルなどの家禽は、「年末存欄」は2900羽、売却された「出欄」は1700羽で、産卵量18tである。数字上概数と思われるが、1戸あたりの年間飼育羽数は、おおよそ22羽程度である(『1997年畜牧業生産状況』による)。

3. 伝承的家禽飼育の戦略と存在意義

従来、ショ人社会では、ブタや家禽類の飼育の大部分は女性が担っていた。現在でも、伝承的な方法で家禽・家畜飼育を行なう家では、その日常的な担い手の主体は女性であり、家禽・家畜飼育に関する在来の民俗知識を、とくに豊富に有するのも女性である。

L.X.氏(1926年生まれ、ショ人、女性)は、そのような伝承的な家禽・家畜飼育に関する民俗知識を豊富に有する女性の一人である。彼女は現在、黄桂行政村に属する上井村に娘夫婦とともに住んでいる。L.X.氏の実家は黄桂村で、子どものころから母の手伝いをするなかで、家畜・家禽に慣れ親しんできた。本格的に彼女が主体となって飼いはじめたのは18歳のとき、上井村に嫁いできてからの話であるから、現在でもう50年以上の飼育の経験があることになる。

彼女の家庭では、1997年12月時点で、ブタのオス2頭とスイギュウオス1頭、アヒルも13羽を飼育していた。ニワトリは夏まで飼っていたが、す

べて病気で死なせてしまっただけで、12月現在はいなかった。彼女は最近、よその土地からニワトリをもってくることにより、今までなかったような病気がはやりだしたと、愚痴をこぼす。とりあえず年が明けるまで待って、病気のはやり具合をみてから、再び飼い始めるつもりだという。

L.X.氏は、家禽・家畜飼育に熟練している。ただし彼女は、飼育数でわかるように、家禽・家畜飼育に専門化しているのではなく、あくまで栽培農業を基盤とする生産活動の合間に動物たちを育ててきたのであって、ほかの黄桂の人々と何らかわるところはない。その飼育は、あくまで伝承的な方法をベースにしていると考えられている。

L.X.氏は、家禽・家畜飼育において昔ながらのやり方を守り、さらにその才はぬきんでしていると村の人々に評価される人物である。母から伝授された技術や知識のみならず、彼女は長年の経験のなかで、飼育に関する技術、知識を培ってきた。まず、彼女が保持する伝承的な家禽飼育知識、技術についてみる。

「解放」前にも、たいてい、どの家でも数羽のニワトリを飼育していたという。富農のなかには、50羽以上も自家用で飼っている者がいたという。ニワトリは、節事のみならず客をもてなす食材として一般的であったが、中農以下の家庭ではめったに食べられるものではなかった。しかし、嫁の両親をもてなすときには、必ずニワトリ料理でもてなしたものであるという。

L.X.氏は、ニワトリ飼育に関してさまざまな伝承的知識を保持している。この地の在来鶏は卵肉兼用であり、第一に卵を生産するために飼育し、その生産の過程で得られる成鶏を肉として利用する。そのため、卵の生産と成鶏の再生産に関し、とくに細かい知識を有している。

彼女が行なう伝承的なニワトリ飼育の方法は、放し飼いである。夜間、ニワトリを家のなかのガイジー(鶏? :ニワトリ小屋)・ガイロン(鶏籠 :ニワトリ籠)で休ませるが、朝には家から出し周辺部を徘徊させる。これら巢のなかには、卵を1個とらずに残すか、あるいは卵の殻をくっつけて卵状にしたものをおいたり、ガンラン(假卵 :偽卵)という木製の卵をおいておかねばならない。そうしないと、ニワトリは小屋のワラや薪のなかなど別の場所で

卵を産むという。

餌には、自家で生産したトウモロコシのあまりや、ヌカ、残飯をまぜて与え、コメに余裕のある家では扱も与える。朝晩2回、決まった時間に与えるのが、放し飼いから規則正しく戻ってくるコツである。ニワトリはアヒルに比べ、早く家を出て早めに家へ帰るといふ。

現在放し飼いにしているニワトリは、在来のニワトリという認識がある。しかし品種名としては特定されず、ただベンディーガイ(本地鶏 : 地元のニワトリ)と表現され(写真13.2)、移入種のワイディーガイ(外地鶏 : 外来鶏)と区別される。在来鶏の場合、たいていの家はガイコウ(鶏公 : ニワトリのオス)、ガイニョウ(鶏娘 : ニワトリのメス)ともに飼育しており、自家で再生産も行なうが、ガイラン(鶏卵 : ニワトリの卵)を生産しないオスは、数のうえで少ない。

通常、この地では春節あけに産卵、ふ化させ、ヒナをとる。ガイコウは春節に、背が大きく足の太い健康なもの1羽を種オスとしてとどめる以外、自家で消費したり売却したりしてすべて処分してしまう。メスも産卵数が減ってきたものは、このときに同時に処分する。したがって、春節の前後には飼



写真13.2 ベンディーガイ(本地鶏の放し飼い)

育数が一時的に減るが、最低でも5-6羽のメスを保留している。種オスは農曆2-3月まで、種オスとして用いる。この時期に産卵数が多く、就巢性の強いガイニョウを母メスとして選び、その卵をふ化させる。

ふ化させるために就巢するニワトリを、ラッピーガイ(懶解鶏：就巢鶏)という。ラッピーには、農曆2、8月ころになりやすいという。L.X氏は例年、春節あけから、母メスとして選んだガイニョウの卵を主に、20個ほど集めてふ化させる。23、24個もふ化させることはできるが、数が少ない方がふ化する率は高いという。

さらにふ化率を高めるために、有精卵か無精卵かを民俗的な技術でみきわめる。有精卵と無精卵は、シヨ語でデェーン(布：有精卵)、ポーン(冇：無精卵)*と区別される。燈火に照らしてみても、なかに白い模様ははっきり出るものをデェーンと判断する。

卵が集まると、ラッピーになったニワトリにピュガイツォイ(孵鶏仔：抱卵)させる。ちょうどラッピーになるメスがいない場合、よそからラッピーガイを借りてきてふ化させることもある。抱卵させて約10日後に、再び燈火に照らしヒナがいるかどうか確かめ、ポーンを取り除く。また、デェーンでも死んでいる場合があり、軽く冷たい水に浸け、動きを確かめる。ふ化日数は、20日と考えられていて、約8割ほどふ化する。

ヒナはガイツォイ(鶏仔：ニワトリのヒナ)とよばれ、数カ月でオス・メスの区別がつく。オスは1斤(1斤=500g)くらいに成長して以後、必要に応じて処分する。農曆7-8月ころの生後およそ6カ月齢でガイトゥン(鷄?：若鷄)とよばれるようになると、メス(約1.5斤)は産卵を始め、オス(約2斤)は交尾を始めるとされる。同時に、ラッピー(懶解：就巢)になるメスも出始める。

ラッピー時には放っておくと、20日から1カ月以上も就巢し、産卵を停止する。ラッピーになると、餌を食べるとき以外巣から出なくなり、人が近

*デェーン、ポーンという表現は、イネの籾の入り具合にも使われる。また、スーという表現も、すべての動植物の交配を表現する言葉で、たとえば、「スイカは、早朝にスーする」と語られる。

づく羽を逆立てて威嚇するのですぐにわかる。ラッピーになるのは鳥ごとに違いがあり、なりやすいものは二十数日ごと、また、まったくラッピーにならないものもある。就巢性の発現の個体差が大きいので、産卵数は鳥ごとに大きく差があると考えられているが、1羽あたりの平均的な年産卵数は100個前後とみられている。ニワトリは、卵をとることをその飼育目的のひとつとされているため、再生産に必要なラッピーも、子とり以外の季節には不つごうなのである。そのため、ラッピーを解除する民俗的な技術が存在する。

これをギンサンレイ(赶醒了：急いで眠りから覚ます)と表現するように、ラッピーは眠っている状態と考えられている。その眠りから目を覚まさせるために、目を布でふさいで竹竿の上に立たせたり、浅い水の上に立たせて腹を冷やしたり、子ども靴を無理やりはかせて縛ったり、ガイロンに閉じこめ断食させたりする。こうすると約1週間ほどで、ラッピーから覚めて、再び産卵し始めるという。

同様に、卵を産まなくなる現象にダンマオ(掸毛：換羽)があるが、これは秋から冬にかけて、ニワトリの羽が生えかわることであり対処法はない。年をとったメスのラオガイ(老鷄：当歳すぎのニワトリ)に多いと考えられている。

ガイトゥン期は1-2カ月と短く、それより大きく成長すると、オスはガイコウ、メスはガイニョウと区別してよばれるようになる。ガイトゥンの肉は、美味で栄養があるとされ、「斤鷄馬蹄鼈(ニワトリは1斤ぐらい、スッポンはウマの蹄位が美味で栄養がある)」という俚諺が語られるほどである。また、メスがガイトゥンになって最初に産んだ卵は、シンガイラン(新鷄卵：最初に産んだ卵)、あるいはタウサンラン(?：最初に産んだ卵)とよばれるが、これには血がついているといわれ、栄養があるため子どもに食させるものとされる。

L.X氏は、アヒル飼育に関しても、ニワトリと同様に細かい伝承的技術、知識を保持し、実践している。

上井村にはファーアオ(番鴨：アヒルの一種)(写真13.3)、タンアオ(田



写真 13.3 ファーアオ(番鴨)



写真 13.4 先導するタンアオ(田鴨)と追従するペイチンアオ(北京鴨)の群れ

鴨：アヒルの一種)、ペイチンアオ(北京鴨：アヒルの一種)(写真 13.4)とよばれる 3 品種のアヒルが存在している。L.X.氏は、1997 年 12 月時点で、ファーアオ 3 羽、タンアオ 6 羽、ペイチンアオ 4 羽を飼育していた。ファーアオは、瘤頭鴨、いわゆるバリケン(Muscovy(*Carina moschata*))で、ペイ

チンアオ是北京ダックであるが、タンアオの品種名は同定できない。ファーアオ、タンアオは「解放」前から黄桂近辺で自給用に飼育されていたが、ペイチンアオは、この村への導入がここ数十年と新しい。その導入は、明らかに換金を目的とした副業のためであり、その導入とときを同じくしてファーアオ、タンアオの飼育も、その飼育目的の比重を販売へと移してきている。

ファーアオは自家でふ化させヒナを再生産するが、一方、タンアオ、ペイチンアオは、ヒナを購入する。アヒルのヒナはアオツォイ(鴨仔：アヒルのヒナ)とよばれ、これを購入することをチョアオ(捉鴨：アヒル購入)という。古くは、縉雲からヒナをもってきていたが、今は台州産が多い。アヒルのヒナ売りは、モアオ(売鴨：アヒル売り)という。黄桂村には農曆 3 月から 4 月にかけて、タンアオのモアオが台州からやってくる。タンアオのアオツォイは、一種の委託飼育方式で販売される。

タンアオのアオツォイは、通常 2 羽 1 組にして売買される。1998 年時点、タンアオのアオツォイは 1 組 5 元で、この値段は、購入(委託)時に決められ、モアオは売った相手の名前と羽数、値段を控えておく。しかし、この時点では実際に代金の支払いは行なわれない。それは、ヒナの時点には、売り手も買い手も、アオコウ(鴨公：アヒルのオス)かアオニョウ(鴨娘：アヒルのメス)か、みわけがつかないためである。

タンアオは、通常は卵生産用として買い求められる。産卵数はほかのアヒルに比べ多いが、成長しても体重約 2 斤と小型で、肉質も悪い。そのため、タンアオはメスのアオニョウに飼育価値があるのであり、オスのアオコウは買い手としては不必要である。だが、ヒナ購入時に雌雄の区別がつかないため、ある程度の数のヒナを購入せねばならない。

タンアオは、約 20 個ほど連産するとしばらく産卵を休止し、年間 200-300 個産卵する。暑い時期には産卵数が減るが、秋口に入って 1 週間ほどの換羽=ダグマオの後、産卵数が増加する。タンアオは卵用アヒルとして品種改良されているため、就巢性=ラッピーの習性はない。

モアオは農曆 8 月、イネの収穫の終わったころ再びこの村を訪れ、残存している羽数を数え精算していく。これぐらいになると、はっきり雌雄の区別

がつく。この際、アオコウは無料になり、アオニョウのみが2羽5円で精算される。この時点までに死んだり処分されたりした分は、メスとして計算する。タンアオは、2カ月ほどで食べられる大きさまで成長し、卵を産まないアオコウの場合、餌を考慮すると早く処分することが望ましいが、精算時にメスとして計算されるため、精算以前の処分は控え、精算がすむといっせいに自家で消費される。アオニョウは卵を産むかぎり飼育するが、おおよそ2-3年で産卵能力が衰えるため、逐次若いメスと更新していく。

タンアオのアオツォイは、立夏の前の生後まもないものを購入せねばならないとされる。それは、成長したものだとし飼いができなくなっているからであるという。通常、購入後2-3週間は家のなかでコメやヌカ、トウモロコシ、細切りダイコンを与え飼育し、ある程度大きくなってから外へ連れ出し、家までの道筋を覚えさせる。このようにすれば、タンアオは放し飼いにしても、夕方になると必ず迷わずに帰ってくるといわれる。立夏以後に買った成長したヒナは、すでに育った別の場所の道筋を覚えており、迷いやすいと考えられている。

一方、ペイチンアオについては、タンアオのように厳密な購入時期が決められていない。農曆2-8月の間に、タンアオと同じく台州からモアオがペイチンアオのアオツォイを売りに来る。ペイチンアオは肉生産用のため、体の大きなオスが好まれる。最終的には7斤ほどまで育つ。売られるペイチンアオのアオツォイは、雌雄の区別がある程度つく段階まで成長しており、購入後に価値が変化しないことから、タンアオと異なり、購入時点ですぐに精算できる。1997年時点、2羽1組2元である。ペイチンアオは、再生産を自家で行なうことはなく、かつ3-4カ月肥育された後にすべて売却される短期飼育であるため、就巢や換羽に関する直接的な民俗知識は稀薄である。

ペイチンアオの飼育方法も、タンアオと同じく放し飼いである。しかしタンアオと同じく、すでにかなり成長しているヒナを放し飼いした場合、頻繁に道に迷うと考えられている。ただ、タンアオを飼育していれば、それにまじって群れをなし、放し飼いが可能になるという。この群れには、ファーアオもまじることが多い。ファーアオは、ペイチンアオと同じく肉生産を主た

る目的として飼育されており、その来入の起源はわからない。ペイチンアオよりも美味とされ、自家消費用のアヒルとして重要な位置を占め、春節などの節事の料理にはファーアオが欠かせない。オスは春節、清明節、端午節、中秋節、冬至などの節事に随時消費されるが、メスはたいてい繁殖用に2-3羽保留される。これも長期間飼育すると産卵数が減少し、ラオアオ(老鴨：当歳すぎのアヒル)になって肉質が悪くなるので、2-3年ごとに更新する。ラオアオは「熱い」食物として胃病の人に好まれるが、ふつうは生後10カ月齢のものをもっとも美味とされる。黄桂村では多い家では10羽ほど、少ない家でも2-3羽は飼育している。ファーアオはタンアオ、ペイチンアオと異なり自家で再生産を行なうため、人々はタンアオ、ペイチンアオにはない再生産の民俗知識と技術を有している。

ファーアオは、早くて羽の生えそろう4カ月齢、遅くとも6カ月齢には産卵を開始するが、夏場暑い時期には産卵しない。通常、春節に多くが消費されるため、その前後に子とりを行なう。10-20個の連産の後、ラピュシ抱卵する。抱卵の期間は、約35日である。その後20日ほどヒナの世話をし、ダンマオの後、再び産卵すると考えられている。春節前後にはこの抱卵を3-4回やらせて、50-80羽のヒナを生産し、自家用以外は売却する者もいる。この時期にファーアオのアオツォイはもっとも需要が多く、価格も2羽1組5円で売れる。

ファーアオにはタンアオと異なり、ヒナの段階で雌雄の区別をする民俗知識がある。ファーアオのオスは、メスに比べ体が長いとされる。また雌雄の区別のために、ヒナを逆さにする民俗的識別法もある。ヒナを逆さに返し、すぐに起きあがるものがオス、時間がかかるものがメスであるという。このような民俗的識別法があるものの、オスの方が肉質がよいとされるので、タンアオと異なり、基本的にオスも飼育価値を有する。

ひとつの家ではだいたいオス・メスともに飼育しているが、もしすべてオスになった場合は、新しいメスのヒナを購入しなければならない。またすべてメスになったときには、近所からオスを借りスー(許：交配)させる。貸してくれた家にはひとつがいのヒナをスーの礼に贈る。通常は、6-7羽のメス

に、1羽のオスがいれば、自然交配は可能である。

スーをすると、約9割は受精する。有精卵と無精卵は、ニワトリと同じくショ語でデーン(布：有精卵)、ポーン(布：無精卵)と区別される。これは、民俗的に5分硬貨を用いて識別される。デーンの場合、5分硬貨の上におくと自然に回転するといわれ、それは選抜されてふ化され、回転しないポーンはすぐに食用に供されるとあくまで伝承的に語られる。

以上のように、家禽飼育は細微な伝承的知識、技術に裏打ちされている。いかにも粗放的、非効率的にみえる伝統的飼育法であるが、では、そこから得られる収益の実態はどのようになっているのであろうか。まず、ニワトリ飼育からみてみたい。

ニワトリの飼育数は個人差、季節差の変移が大きく、さらに収益となる卵の生産量もニワトリの個体差などにより変移するため、ニワトリ飼育からの収益の一般的状況を推しはかることは困難である。ここではL.X.氏の1997年度の収益を推計してみよう。ただし、先にも述べたように、1997年夏にL.X.氏はすべてのニワトリを病死させている。したがって推計は、その分を死ななかったと仮定して修正した値とする。

この地のニワトリ飼育は、卵肉ともに確保することを目的とされている。まず、肉から得られる収益を計算してみる。

オスは順次、必要に応じて処分され、また、春節には種オスとなる頑強なものを除き、すべて処分されることは先にも述べた。このころには約5斤ほどまで成長しており、自家で消費する以外は、老竹鎮で行なわれるオネツ(過行：定期市)で売却される。在来鶏であるベンディーガイは、移入種のワイディーガイより価値があり、1斤あたり18円で売れるので、オス1羽あたりおよそ90円で売却されることになる。L.X.氏は1997年の春節に、自家で2羽消費し、6羽のオスと4羽のメス(約4斤ほどに成長)を売却して、828円の収益をあげたという。

ついで、卵の生産から得られる収益を考えてみる。通常村内には、卵を仕入れてオネツで商売をする者がいる。そのような卵で商売する人は村外からもやってくるので、一般の農家では1カ月に2、3回は売却する機会がある。

ベンディーガイの卵も肉と同様に、ワイディーガイに比べ高価で、1斤あたり(およそ9個分)6元(ワイディーガイは3.5元)で取り引きされている。L.X.氏はガイニョウになったメスを、コンスタントに卵を産み続けるかぎり飼育し続ける。だいたい3-4年は卵を産み続けるが、2年ほどで産卵能力は落ちてくるため、できるだけ若いメスへと毎年更新する。彼女は1997年夏に、病気の流行とともに15羽のメスと8羽のオスのすべてを失ってしまった。この時点で、産卵能力のあるガイニョウは7羽であった。L.X.氏は、端境期である春節のころでも、毎年5-6羽の成メスを保留しているというから、この羽数は平均的なものと考えてよからう。

この7羽が病死することなく、コンスタントに1年間卵を生産したとして、平均的にみつもられている年産卵数約100個に乗すると約700個となり、およそ77斤の産卵量が期待される。すべて売却したとして、得られる収益はおよそ462元みつもられる。したがって、L.X.氏は、1997年度には、春節時の成鳥売却と年間の卵売却をあわせて、約1290元ほどの収益をあげることが期待されたことになる。

つぎにアヒル飼育を考えてみる。十数年前までは、黄桂村のアヒル飼育は自家消費を主たる目的として行なわれていたが、現在は自家消費のほか、販売による換金にその飼育の主たる目的は変化している。ファーアオ、ペイチンアオの成鳥と、タンアオのアオラン(鴨卵：アヒルの卵)は、ニワトリと同じく定期市で売買される。ファーアオはオス約6斤、メス約4斤に成長し、1斤あたり5元、春節のころには7元ほどで取り引きされる。ペイチンアオは安く1斤あたり3元、タンアオの卵は、1斤(およそ7個分)あたり4元で売買される。このアヒル飼育から得られる収益について、ニワトリと同様にL.X.氏の1997年度の例から推計してみよう。

1997年12月時点で飼育しているファーアオ3羽(オス1羽、メス2羽)、タンアオ6羽(すべてメス)、ペイチンアオ(すべてオス)4羽のうち、ファーアオは自家でヒナどりしたものである。タンアオは、モアオから農曆3月に10羽購入したもので、そのうち4羽がオスだったために、モアオへの精算時には2羽1組5元で、メス6羽分15元を支払った。4羽のオスはモアオ

への精算以後、随時自家消費し、12月時点にはすでにすべて処分されていた。ペイチンアオも、モアオから購入したもので2羽1組2元、4羽で4元支払った。したがって、アヒルの購入コストは19元ということになる。餌は、ニワトリと同じく自家生産物の余剰、残滓を用いるので、コストには含まない。

一方収益であるが、タンアオ1羽から生産される卵の年産卵数を最大300個とみつもと、全体の産卵数は1800個となる。1斤はおよそ7個分に相当するので、生産量は約257斤、収益は1028元になる。ペイチンアオは7斤ほどに育ち、1斤あたり3元にしかならないので、4羽で得られる収益は84元にとどまる。ファーアオはオス1羽、メス2羽全部を売却したとすると、通常期で70元ほどになる。したがって、アヒル全体から得ることのできる収益は1182元ということになる。購入コストをさしひいた純益は1163元ということになる。ただし、先にも述べたように、ファーアオに関しては、L.X.氏はすべて自家消費し、さらにタンアオの卵も自家消費する(鶏卵より消費する頻度は多い)ので、実際の金銭的収益はもっと低く推計されるべきであろう。

以上のように、1997年度のL.X.氏がニワトリ、アヒルなど家禽から獲得できる純益は、最大値2500元近くにもものぼる。もちろん、先に述べたような自家消費分、さらにアクシデンタルな損失分をさしひけば、その額ははるかに低くなるであろうが、この獲得可能な約2500元という値は、先に紹介した黄桂行政村人口1人あたりの年収約2150元よりも多く、70歳をこした高齢の女性があげることができる収益としては、けっして低いものではない。伝承的な家禽飼育は、この村の標準的な金銭収入水準を満たすことのできる活動であるといえる。しかし、L.X.氏など伝承的な家禽飼育を展開する人々は、単に金銭的な収入をあげるためにその伝承性を維持しているのではない。金銭的な収入の最大化には関心はあるが、それのみが最大の関心事とはなっていないのである。

伝承的な家禽飼育を続ける人々には、共通した家禽飼育規模を抑制する意識がある。この意識は、簡単にいって「飼えるだけ飼う」という言葉で表現さ

れる。「飼えるだけ」というのは、その家のなかで家禽飼育に無理なく携われる人の数と、自家で賄える飼料にみあっただけ、という意味である。とくに飼料の量を飼育数の限定要因として、多くの人々は考えている。この飼料量はほかの生業による生産とかかわっており、余剰の生産物を家禽飼育にまわせる家では飼育数も多い傾向がある。伝承的な家禽飼育は、この点において他生業と結合(integrate)することにより、資源を無駄なく有効に使いコストを低く抑える方法をめざしたものであるといえる。このコスト低減には、さらに放し飼いという伝承的方法が有効である。それほど多量とは思えないが、家庭内で供給する飼料以外に、放し飼い中に行なわれる食餌行為によりさらに無償の資源を利用できる。また、放し飼いにより飼育環境管理(鶏舎の清掃など)の労働の手間も低くできるのである。

後にも述べるように、配合飼料を購入することによって飼育数を拡大し、飼育期間を短くすることが可能である。しかし伝承的な家禽飼育では、配合飼料を購入してまで飼育規模を拡大する指向性はまったくない。むしろそれはコストを増大させることになり、L.X.氏らにとっては、それは危険なことだと考えられている。実際1997年度には、L.X.氏は保持していたニワトリすべてを病気で失ってしまった。L.X.氏の産卵鶏は1997年時点で半年生存し、夏に死亡させたニワトリの損害は、卵だけでいえば単純に200元強、加えて産卵可能なメス7羽ということになるが、死亡した15羽のメスと8羽のオスが、もし死亡せずにすべて売却されたらと仮定するならば、その損害額は約1800元を加えた2000元ほどにもものぼり、その金銭的な損失は無視できない。この損失は、翌1998年の春節時に成鳥売却ができないことで顕在化する。しかし、その損失は金銭的コスト(労働力や飼料)がほとんどかからなかったことにより、生活自体への影響は比較的軽くすんでいる。ここに購入飼料のコストが加わっていれば、当然それは他生業から得られる金銭的な収益から補填しなければならない。それは生活全体の維持において、不安定要因となりかねない。つまりコストの低減は、その生業のもつリスクの低減につながっているのである。これはニワトリ飼育ばかりでなく、アヒル飼育にも同様なことがいえる。

この地の家禽飼育は、経済的にそれほど大きな地位を占めてはいないが、確実に他生業と結びつき、生活の全体性維持のなかで生産量の最大化と生活の安定化という、2点のバランスをとりながら展開されているのである。

このように、家禽飼育はある程度の範囲内で、生活の維持に金銭面から寄与している。ただし伝承的家禽飼育が継続されるのは、そのような金銭的な実利のみを追求するからではない。その行為自体を継続する別の理由を、伝承的飼育を行なう人々も持っている。

たとえば、1997年度にニワトリをすべて失ってしまったL.X.氏の損失は、金銭的な側面ばかりにとどまらない。事実L.X.氏は、日常の生活のなかで肉と卵をストックできなくなったことこそを、むしろ大きな損失と考えている。現在、ニワトリからの金銭的な利益は、生活を左右するほどの大きさをもって期待されていない。その飼育にかけられるコストが諸生業の余剰であるのと同じく、その利益もあくまで余剰なのである。

また、日常頻繁に食卓へとはのぼらないものの、「改革・開放」前に比べ、ニワトリの肉や卵は求めやすいものとなってきた。しかし、かつて貴重な食材として日常の食卓にはのぼることがなかった肉や卵に対する価値が、彼女にはいまだ記憶されている。そのため、ある種の生活の豊かさを確認させてくれる肉や卵をストックする機会を失うことこそ、彼女にとって大きな損失と受けとめられたのである。年間、節事や祝いごと、来客時などに利用することによってその豊かさは確認されるが、その食材を自分で確保できない状況を彼女は問題視しているのである。

このように家禽は商品としての側面と、生活の豊かさの証としての側面の二重性をもつ。それぞれへの比重のかけ方は、各家の経済状況で大きく異なってくるであろう。ただ黄桂行政村では、「改革・開放」以後の市場経済浸透の後も依然、商業性に特化しない形で、伝承的な家禽飼育が意味をもち続けているのである。伝承的な家禽飼育が現在でも意味をもつのは、生産量の最大化と生活の安定化という2点のバランスをとりながら、精神的な豊かさも含めた生活の全体性維持において、その方法が適していると人々に認識されているからである。

4. 伝承的家畜飼育の戦略と存在意義

近年、黄桂行政村におけるブタは、換金目的でかつてより重要視されているものの、先に紹介した統計的な飼育頭数のように、とくにそれを拡大する指向性はみられない。以前と同じく、農業生産の合間に、伝承的な方法で、少数のブタを小規模に飼育する者がほとんどである。その日常的な飼育技術も基本的なところで大きく変化していないが、繁殖や品種の側面において、現代化、あるいは市場経済に対応した変化がみられる。それでもL.X.氏は、自分の行なうブタ飼育は本来のショ人の飼育方法であり、自分は伝統的なやり方を守っていると強調する。

L.X.氏は昔ながらのやり方を守り、さらにその才はぬきんでしていると村の人々に評価される。あるとき、70斤の子ブタを10カ月間肥育し、299斤(1斤=500gなので約150kg)まで育て上げたことがあり、また1997年度、ある1頭を約7カ月間で、10カ月飼育並の大きさまでに仕上げて売ることができたので、村中で話題となっている。人々は、「L.X.氏の水桶はとてもよい(ブタを大きくする水が入っている、転じてブタ飼育にすぐれているの意)」と評するほどである。彼女は、現在でも基本的に「解放」前とほとんどかわらない方法で、ブタを飼育していると語る。そしてこの方法は、生産大隊時代もほとんどかわらなかったという。

ブタはかつて家禽以上に貴重で、春節や清明節、端午節、中元節などの節事に食べられればよい方で、日常的にはほとんど食卓にのぼることはなかった。「解放」前には地主や富農が数頭単位で保有し、富裕中農、下中農でも1戸に1-2頭いればよい方で、貧農などでは飼育することすらできなかった。そのため家禽以上に、生活の豊かさの証としての意味を、ブタは今でももっている。

彼女は、この貴重なブタに関して、人間とかわらぬようにていねいに育てれば必ず大きく成長すると、手をかけることの重要性を指摘する。毎日3回、ダイコンや野菜のクズ、サツマイモ、ヌカ、雑草などをまぜて、1回で食べ

きれる分だけ給餌し、配合飼料は用いない。給餌の際には、消化を助けるため必ず煮てやわらかくする。朝に餌をつくりおきするが、給餌の際は暖めなおす。子ブタのときにはとくに注意を要し、コメの粥や卵をませたりして、体調に気をつける。ときどき、虫下しとしてヨウチャ(油茶:アブラツバキの仲間)の実のしぼりかす(燃料として用いている)を燃やした灰を粥にませ与えるという。

もともとブタは、自分の家で繁殖させることもあったが、数年前に繁殖はやめ、現在では肥育のみを行なうようになってきている。ジーツォイ(猪仔:子ブタ)は、娘夫婦が、2と7のつく日に老竹鎮で行なわれる定期市オネツで購入してくる。

先にも述べたように、黄桂行政村のブタの全飼育頭数は730頭で、そのうち繁殖用メスは18頭にしかない。最高でも全戸の約9%ほどしか繁殖メスブタを保持せず、ブタの自家再生産を行っていない。残りの大半の家庭では、村外からブタを購入しているのである。元来、繁殖に携わる人は、あまり多くはなかったという。

「解放」前には、ウージー(烏猪:黒ブタ)を繁殖させていた。これは、縉雲からもたらされたと思われるブタで、これをベンディージー(本地猪:地元ブタ、地ブタ)だと考えていた。ところが、1958年に杭州から白いブタを獣医たちがもってきた。その後、さまざまな品種が村にきて、ウージーはほとんど姿を消すこととなる。現在わずかに残るウージーは、同じ麗水市内の碧湖鎮からもたらされた碧湖猪という地方品種であり、現在ではこれをベンディージーと考えている。

子ブタは、毛に光沢があり前足が太く、背の幅が広いものほど、成長がよいと考えられており、そういうものを選んで購入する。品種はさまざまであるが、最近では碧湖猪と長白(ランドレース種)をかけあわせた「雑交種」(F1)が、成長がよいということで多く出まわっている。この肥育用の「雑交種」の子ブタは、通常、約4カ月齢(体重70斤前後)まで繁殖者に肥育されて売られる。それは、小さいものほど病気になりやすいと考えられているので、4カ月齢前後のものが好まれるからである。L.X.氏も、70斤前後の子

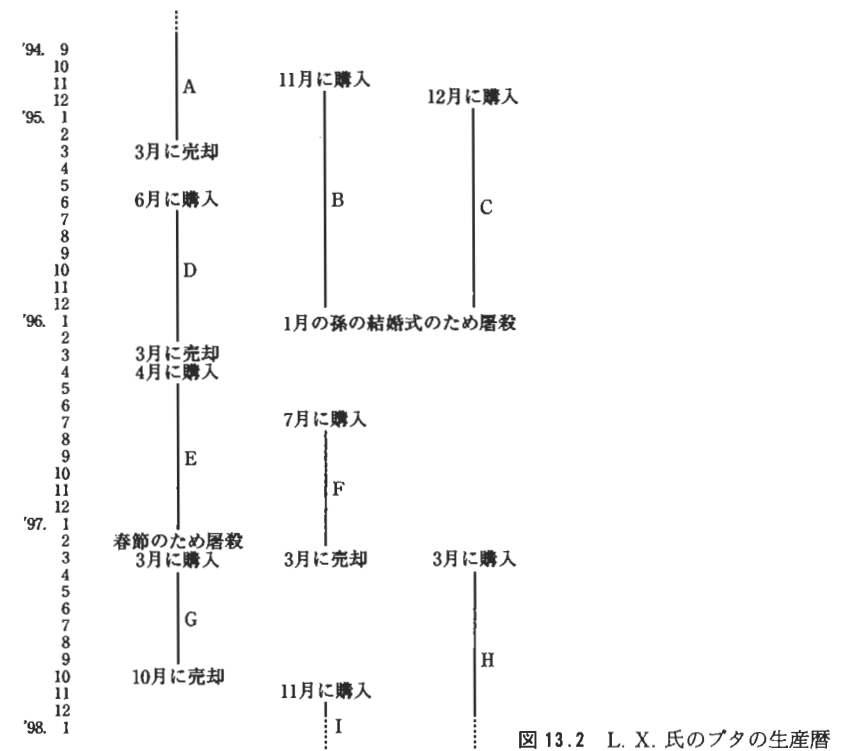


図 13.2 L. X. 氏のブタの生産暦

ブタを選んで購入するという。

L.X.氏には、ここ数年、飼育したブタについての記憶が鮮明に残っている。

図 13.2 は、それを生産暦にまとめたものである。彼女は、1995年初頭には、94年初夏(A)、11月(B)、12月(C)に購入したブタ3頭を飼育していた。Aのブタは95年3月に売却し、これにかえて6月にDのブタを購入した。B、Cのブタは96年1月1日に行なわれた、孫の結婚式の料理用に屠殺した。

Dのブタは、1996年3月に売却。これにかえて4月にEのブタ、さらに7月にはFを購入し、Eを翌97年の春節の料理用として屠殺し、Fを3月に売却した。そして、これらにかえてG、Hを購入した。このGが、約7カ月間の飼育で10カ月並の大きさ(肉だけで約200斤(約100kg))までに仕

上げて村中で評判となったブタで、10月に売却することができている。これにかえてIを11月に購入している。彼女の家では1997年末存欄で、2頭のジーコウ(猪公:ブタのオス)を飼育している。このH, Iはすべて去勢したロウジー(肉猪:肥育ブタ)である。現在、子ブタを購入するときには、すでに去勢済みである。

この生産暦からわかるように、1995-1997年のL.X.氏の飼育頭数は9頭にのぼる。購入から処分まで、明確に飼育期間のわかっているB, C, D, E, F, Gの6頭の平均飼育期間は、約9.8カ月で、彼女が語るほぼ9-10カ月という飼育期間の数値と一致する。年平均3頭が、彼女に飼育の上限と考えられている。これ以上飼育すると、飼料上あるいは手間からいって、自分一人で面倒をみられないという。通常は、ブタの成長具合、自家での需要に応じて購入、販売、処分の時期が、それぞれのブタで異なっているため、頭数は変化する。最大で3頭飼育しているものであり、1996年の3月から4月、また97年の2月から3月のように、飼育していない時期もある。実際の販売、処分頭数は95年に1頭、96年に3頭、97年に3頭で、ここ3年間で年平均約2.3頭生産したことになる。

さてこの値から、彼女のブタ肥育の収益を推計してみよう。

たとえば、1997年Gのブタの場合、67斤の子ブタを最初に購入してきた。このとき、同時に購入したHは71斤で、通常、彼女は70斤前後のある程度育った4カ月齢前後の子ブタを選ぶという。購入時の子ブタの価格は、体重1斤あたり6元であった。したがって、Gのブタは402元で購入された。これが、売却時に肉のみの重さ200斤になっている。このときのブタ肉の価格は1斤5.8元であり1160元になる。これに、肝臓などの内臓分30元を加えて、1190元の収益をあげたという。

先にも述べたように、L.X.氏は、家禽と同じく飼料を自家で賄っているため、ブタ生産には、子ブタ購入費、および労働力以外のコストがほとんどかからない。したがって、ブタの購入費を収益からさしひいた額を、基本的に純益とみなすことができ、これは758元になる。もし、年平均約2.3頭生産するブタをすべて売却用にまわすとしたら、L.X.氏は約1743元の収益をあ

げることができる。

この額は、黄桂行政村人口1人あたりの年収約2150元の8割程度であり、70歳をこした高齢の女性があげる収益としては、家禽飼育と同じくけっして低いものではない。L.X.氏は、ブタ飼育の収益を蓄え、子どもの教育や、結婚の費用に使ってきたようで、その経済的な意味は、主たる生業の収益に比べ個別性が強いようである。このような金銭的な利益に加え、家禽飼育と同じような喜び——生活の豊かさの証——が、ブタ飼育にはある。さらに、L.X.氏は自分もっている技術が村のなかで評価されていること、そして、実際にほかの人より大きなブタを早く成長させることができたことで、ささやかな荣誉感にひたることができている。

以上、黄桂行政村における伝承的な家禽・家畜飼育の意味について、一人の女性を例にみてきた。ニワトリやアヒルの家禽飼育と同様にブタなどの家畜飼育にも、他生業との結合(integrate)によりコストを低く抑え、リスクを低減させる指向性がみられる。これは同じくその生業のもつリスクの低減につながっているのである。

この地の伝承的な家禽飼育と家畜飼育は、ともに他生業と結びつき、生活の全体性維持のなかで、生産量の最大化と生活の安定化という、2点のバランスをとりながら展開されているのである。この生産量の最大化は、単に金銭的な利益の最大化を意味するのではなく、精神的な喜び——生活の豊かさや荣誉感など——を拡大することにもなっている。伝承的な家禽・家畜飼育が伝承される意味は、ここにあるといっても過言ではない。それが非近代的な技術であると認識されていても、けっして無意味というのではなく、現在でも存在意義がそこには十分に認識されている。

L.X.氏は、このように自分の生活を金銭面、精神面から豊かにしてくれるブタの家禽・家畜の安寧を願って、儀礼を欠かさない。たとえば、ブタを屠殺するときには、その血を紙につけ、ジーラン(猪欄:ブタ小屋)の戸口にさし、線香をそなえまつる。これをシェザイ(血財:ブタの血をつけた紙)とよび、これが多いほど、家は豊かになるといわれる。また、このシェザイは、ブタが下痢したときに、燃やして与える民間治療薬ともなる。



写真 13.5 プタ小屋にはられた「血財肥大」の紙札



写真 13.6 トリ小屋にはられた「鶏鴨成群」の紙札

さらに、ブタに限らず、家畜の飼育場所の入り口には、年越しにその成長を願った札をはりつける。ジーランには「血財肥大(シェザイ(ここではブタをさす)が、肥えて大きくなるように)」(写真 13.5)、「猪大如象(ゾウのようにブタが大きくなるように)」,「猪大如牛(ウシのようにブタが大きくなるように)」,ガオラン(牛欄:ウシ小屋)には「力大如虎(トラのように力が強くなるように)」,「六畜興生(家畜が栄えるように)」,ガイジー(鶏?:ニワトリ小屋)・ガイロン(鶏籠:ニワトリ籠)やアオジー(鴨?:アヒル小屋)・アオロン(鴨籠:アヒル籠)には「鶏鴨成群(ニワトリ, アヒルが群れになるように)」(写真 13.6)といった文言の書かれた紙札がはられ、その家禽・家畜の成長の安寧が祈願されるのである。

5. 新しい家禽・家畜飼育の戦略と存在意義

以上のように、黄桂行政村の伝承的家禽・家畜飼育はいまだ重要な「伝承」の意味をもっているが、一方で、新技術、知識を応用した新しい試みが若い世代のなかで模索されている。それは、明らかに「改革・開放」以後の市場経済に対応した方法である。

たとえば、黄桂村に住むL.B.氏(1955年生まれ、シヨ人、男性)は、自分の家の一室をニワトリの飼育舎とし、移入種ワイディーガイの飼育を試みている。その飼育方法は、伝承的なニワトリ飼育とは異なり、舎飼いによる短期育成という近代的なものである。L.B.氏は、1996年にこの方法を始めたばかりである。この地域の中心的な都市部麗水に出稼ぎに行った際に養鶏場での飼育方法をみて、これは儲けになると確信し、その飼育法を学んできたという。L.B.氏は1996年、時間に比較的余裕のできる7月から翌年2月にかけて、7,8月が第一回目、9,10月が第二回目、11,12月が第三回目、1,2月が第四回目という形で、1シーズンに4回のサイクルで飼育した。ヒナを麗水の育雛場から購入し、約50日ほど育成して出荷した。ヒナは育成中に死ぬ分を考慮して、毎回110羽購入した。そうすると出荷時には100羽ほどになったという。ワイディーガイは肉用なので、購入にあたって雌雄を

問う必要はない。

ワイディーガイの飼育は、伝承的なニワトリ飼育に比べ、はるかにコストが大きい。餌は配合飼料を購入して確保する。昼夜を問わず配合飼料を給餌する必要がある。冬場には、鶏舎として用いている部屋の温度をあげるため、500 Wの電灯を複数灯して暖める。また、ベンディーガイに比べ病気になりやすいので、しばしば獣医の勧める薬を餌にまぜてやらねばならない。ヒナの購入代金も含めて、これらの飼育に関するコストは、1羽あたり約20元(100羽出荷するとして)にもものぼる。

一方、ワイディーガイの販売価格は、在来鶏であるベンディーガイに比べかなり安くなる。L.B.氏は売却する時直接麗水の都市部へともっていくが、ベンディーガイが1斤あたり18元、オス1羽あたりおよそ90円で売却されるのに対し、ワイディーガイは1斤あたり5元ほどでしか売れない。約50日の育成で7斤ほどまでに成長するが、実売の価格は35元程度と、ベンディーガイのオスに比べて約1/3の価格しかつかないのである。

しかし、多羽数飼育と短期飼育により、伝承的なベンディーガイ飼育に比べ収益を非常に大きくすることができる。L.B.氏の場合、1996年夏から1997年春にかけてコンスタントに1サイクル約100羽出荷し、それを4サイクルやることによって全体で約1万4000元もの収益をあげることができた。その飼育にかかった費用は、L.B.氏の労働力を換算しないでも、1サイクル2000元はかかっている。つまり、1シーズンでは約8000元ものコストを費やしているのである。だが、その結果もたらされた純益は、全体で約6000元にもものぼるのである。これは、伝承的ニワトリ飼育を行なうL.X.氏が1997年度にあげることでできた期待純益の約1290元に比べ、約4.6倍の利益であり、伝承的な飼育法では到底達成できない利益である。L.B.氏は、1羽あたりの利益は少ないが、飼育数を増やし、飼育期間を短くすることによって生産量を増加させ全体の利益を向上させる、という戦略をとることにより、従来の伝承的飼育法では到底獲得できない収益を得ているのである。

この戦略は明らかに、近年の市場経済の動向を強く認識したものである。飼育数を増やすためにヒナを購入し、さらに餌も成長をよくするために配合

飼料を購入しなければならない。それに、薬品代や設備費を加えると、そのコストは伝承的な飼育法に比べ格段に大きくなるしかない——伝承的飼育法のコストは、ほぼ0に等しい——。このコストは当然、飼育前に投資という形式で支払われているのである。L.B.氏は養鶏を始めるにあたり、出稼ぎで稼いだ収入を元手とし、飼料、薬剤の購入費や設備費に5000元ほどを投資したという。高コストで高生産を生み出すという戦略は、ニワトリの販売にとどまらず、必要物資の市場性が確保されないかぎり不可能なのである。その意味でL.B.氏は、市場経済の浸透する現状をうまく認識しているといえる。

しかし、このような方法は誰にでも採用できる方法ではない。まず先行投資する資本が必要であり、それはL.B.氏のように都市部に出稼ぎに出た者でないと確保することが難しい。さらに、高コストは高リスクにつながることを覚悟できる者でないとこの方法は採用できない。多羽数飼育、短期飼育をめざしたとしても、それは必ずしも確実に利益をもたらすとは限らないのである。相手が動物のため、いつも病死などの可能性は存在する。一度伝染病にみまわれ全滅ということになると、その高コストゆえに損失は甚大になるのである。事実、1997年冬において、L.B.氏はワイディーガイの養鶏を控えていた。それは、夏場にニワトリの伝染病が蔓延し、この村のニワトリを大量に死に至らしめたからである。L.X.氏などのニワトリもこの病気で全滅したわけであるが、このような状況では、多羽数飼育は躊躇されるのである。L.B.氏は、年が明けて病気の状況をみきわめた時点で、再開するつもりである。

このような新しいニワトリの飼育法は、伝承的な飼育法と比べ、その技術のみならず、その方法の存在意義という側面まで異なっている。先に伝承的飼育法が、生産量の最大化と生活の安定化という2点のバランスをとりながら、精神的な豊かさも含めた生活の全体性維持において意味をもっていることは述べた。しかし新しい飼育法では、生産量の最大化にとくに関心がはらわれ、その結果、生活自体においては不安定な要因をはらんでいる。ニワトリ自体の生産と利用から得られる精神的な豊かさもそこには稀薄で、あると

すれば金銭を多く得たという喜びと、実質的な生活の向上である。事実、L.B.氏は自分の飼育していたワイディーガイを、自家用に用いることはなかったという。これは味覚的な問題もあるが、明らかにそのニワトリに対し商品としての価値のみをみだしているからである。その点において、ワイディーガイの飼育は、生活そのものの豊かさを証明するものではなく、そこから得られる金銭のみが生活の豊かさを証として認識されているのである。新しい飼育法はまだ黄桂行政村では散見するほどであるが、市場経済のさらなる浸透に従って、さらに増えていく可能性は高い。

このような新技術の導入により市場経済に適応しようとする動きは、ニワトリ飼育ばかりではなく、ブタの飼育にもみられる。これもまた、出稼ぎ経験をもった若い世代が取り組みはじめた。

L.Z.氏(1973年生まれ、シヨ人、男性)は、黄桂行政村に属する上井村に両親とともに住む若者である。彼は中学卒業後、しばらく出稼ぎに出ていたが、家族の面倒をみるために22歳のときこの村に戻ってきた。彼は、伝統的な方法で小規模にブタを飼育することに飽きたらず、できるだけ新しい方法でブタを飼育しようと考えている。それは、肥育ではなくジーツォイ(猪仔：子ブタ)の生産、つまり繁殖である。

現在、都市部を中心に肉需要が高まるなか、ブタが商品としての可能性を大きく有することを黄桂行政村の人々は熟知しているが、L.Z.氏のように飼育頭数を増やしてまで拡大しようとする者はあまり多くはない。それは、ブタ生産を子ブタ生産で拡大させるには資本が多く必要で、病気などの生産上のリスクを余計に抱え込むことになるからである。とくに子ブタの繁殖生産は、そのリスクもさらに高まる。

L.Z.氏は1997年12月時点で、36頭のブタを飼育している。そのうち34頭がロウジー(肉猪：肥育ブタ)のジーツォイで、残りの2頭が自家消費用として肥育しているロウジーと繁殖用のジーニョウである。L.Z.氏は、種メスであるジーニョウの品種を、「浙江大白猪」と語る。彼は自家で繁殖させ肥育するとともに、今年から購入した子ブタも肥育している。12月時点で飼育中34頭のロウジーのうち、12頭が10月3日に自分の家で産まれたブタ、

22頭が11月26日に購入したブタである。自分で生産したブタは約3カ月、購入したブタは2カ月ほど肥育して、需要が高まり価格が上昇する春節のころに売却する予定である。

L.Z.氏がまだ8歳ころ、彼の家庭では初めてブタを飼い始めた。そのころは、母が主としてブタの世話をし、L.Z.氏もときおり手伝うことはあった。しかしその方法は、先に述べたL.X.氏など大半の村民が行なうような伝承的な小規模の肥育である。子とり、繁殖の経験はなかった。彼が伝承的な肥育ではなく、新しい繁殖を企図したのには、出稼ぎ中の知見や経験、また、友人の獣医L.L.氏からの助言が大きく影響している。そして、自分自身で畜産指導書を読みあさったことが、その技術の裏づけとなっているようである。

図13.3は、L.Z.氏のブタの生産暦である。彼は帰郷後、1頭の繁殖用ジーニョウと5頭のロウジー(I)、計6頭のブタを購入した。ロウジーの子ブタは、翌年94年の春節のころすべて売り払った。彼は子とりをする目的でジーニョウを購入したので、12月に種つけした。種オスは老竹鎮にいる長白(ランドレース種)で、老竹鎮には2頭種つけ用に飼われている。30-40元の謝礼で、種つけ1回。受胎しなければ、何度もやりなおしてもらえる。このジーニョウは5-6年繁殖に使用して、新しいメスと更新するつもりである。

彼は年2産、1年に2回の繁殖を行なっている。その1回は、売却時期を子ブタの値段があがる春節前後にあわせるようにしている。ブタの妊娠期間は110日前後と考えられており、約70日の間隔をおいて、年2回の連産を可能にしている。通常は12月中に種つけし、翌4月に出産。その後1カ月半-2カ月ほどで断乳すると、ジーニョウは発情し種つけが可能となるので、6月中に種つけし、10月にその年2回目の出産を行ない、12月に再び種つけするというサイクルになる。

産まれた子ブタは、断乳の後2カ月間、1日3回に分けて、配合飼料をサツマイモやダイコンなどの自給飼料にまぜて煮て与える。配合飼料は購入せねばならず、当然コストがかかるが、もし配合飼料を使わないと、成長に2

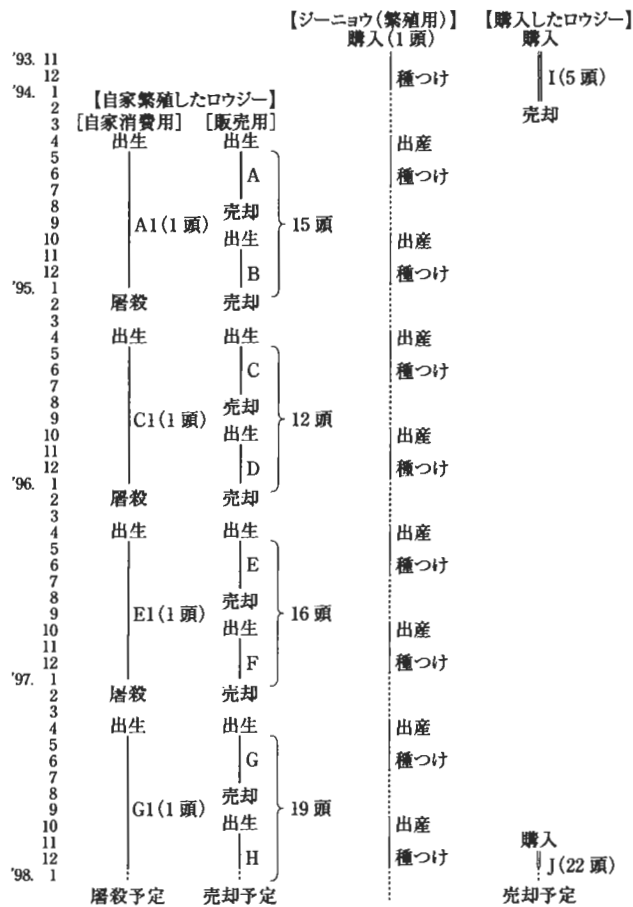


図 13.3 L. Z. 氏のブタの生産暦

倍の時間を要するという。多くのブタを飼育する分、伝承的な小規模肥育に比べ給餌の手間にかかる。しかし、20歳代男性であるL.Z.氏にとっては、日常の農作業の合間に十分にこなせる労働量でしかないという。子ブタは4カ月齢約70斤ほどまで肥らせて、老竹鎮で肥育農家に売却する。

L.Z.氏は、1994年には4月に生まれたA群、10月に生まれたB群をあわせて15頭売却した。さらに、A群と同じに生まれた1頭(A1)を、春節の

自家消費用として留保しているの、産まれて途中で死んだりしたものを除いた94年のブタ生産は16頭になる。同様に95年はC1, C, D合計13頭、96年はE1, E, F合計17頭、97年はG1, G, H(98年春節に売却予定)合計20頭生産している。ここ4年の繁殖した子ブタの平均売却数は15.5頭である。

この値から、L.Z.氏の子ブタ繁殖飼育からの収益を概算してみよう。

子ブタの値段は、97年にはおおよそ体重1斤あたり6元前後で推移していたというから、約70斤まで成長させて売るL.Z.氏の子ブタは、1頭あたり約420元になる。

この額を、ここ4年の繁殖した子ブタの平均売却数15.5頭に乘すると、6510元になる。肥らせるための断乳後2カ月分の配合飼料(1斤あたり1.45元)は、1頭あたり80斤116元分必要で、15.5頭分で1798元のコストがかかる。また、種つけが1997年の場合、2回で76元かかっている。したがって繁殖生産したブタの平均的な売却における純益は4636元、子ブタ1頭あたり約299元となる。

このL.X.氏がブタ繁殖飼育であげる収益の概算は、先に紹介した年平均約2.3頭を伝承的な方法で肥育生産するL.X.氏のみつもり収益1743元(1頭あたり約758元)の約2.7倍となる。L.Z.氏の収益には、例年生産する春節用のブタを含んでいないので、さらにブタからあげられる収益差は大きくなるものと考えた方がよい。

この収益を、もしL.Z.氏が伝承的なブタ肥育のやり方であることは、いくら若いL.Z.氏とはいえ容易なことではない。約2.7倍の収益を成豚肥育であげるためには6頭の成豚を飼育せねばならず、先にも述べたように飼料の自給の面からいって不可能である。配合飼料を与えると、食餌量の多い成豚ではコストがみあわない。成豚を純粋に配合飼料のみで育てると、1日に8斤は必要であると考えられている。肥育期間をふつうの人が行なう約10カ月300日とすると、売却まで2400斤の配合飼料が必要なことになる。このコストは、3480元にもものぼる。配合飼料を用いれば、肥育期間が短縮されることは間違いはないが、200斤の成豚が1200元足らずで売買されてい

ることから考えると、配合飼料のみで肥育生産するメリットはなさそうである。その点からいって、L.Z.氏の行なっている子ブタの繁殖生産は、肥育生産の拡大の限界をのりこえることのできる、「新しい」飼育形態とL.Z.氏自身に考えられている。

以上のようなコンスタントな繁殖生産に加えて、L.Z.氏はさらに、より収益のあげられそうな飼育形態を模索している。それは、小さな子ブタを購入し、短期飼育して大きい子ブタとして売却するという、さらにリスクの大きいやり方である。

1997年12月時点で、36頭の子ブタを飼育していることはすでに述べた。そのうち、34頭がロウジー(肉猪：肥育ブタ)のジーツォイ(猪仔：子ブタ)で、12頭が10月3日に自分の家で生産したブタ(H)、22頭が11月26日に購入したブタ(J)である。この22頭(J)の飼育が、新しい飼育形態の模索である。

購入したブタ(J)は2カ月ほど飼育して、自分で生産したブタ同様、需要が高まり価格が上昇する春節のころに売却する予定である。彼はこのブタを、老竹鎮の獣医Z.L.氏と共同で購入した。この購入についていだし、斡旋したのは、このZ.L.氏である。Z.L.氏がいうには、安徽省に成長のよいブタがいるという。これを松陽県(麗水市の隣県)の知人が、多数安徽省から仕入れているという。

これは約2カ月齢の断乳のすんだばかりのもので体重25斤前後しかなく、輸送料込み1頭200元、1斤あたり8元と、このあたりで売っている子ブタよりも単価が高かった。しかし、老竹鎮では、小さいものほど病気になりやすくリスクが高いと考えられているので、4カ月齢前後のものが好まれる。そのため、ほとんどこのようなブタは大量には出まわらない。

Z.L.氏は、この子ブタを2カ月で70斤にすれば、今の子ブタ価格でいって420円で売れる。それから2カ月分の配合飼料代1頭あたり80斤116元と、購入費用200元をさしひいても、100元あまりの利益があがると計算した。L.Z.氏もこれに納得し、父母の貯金を借りて22頭計4400元投資したのである。しめて2000元あまりの純益をもくろんだのである。その後、22頭の子ブタは問題なく順調に育っている。

ところが、購入してちょうど1カ月後の12月26日、老竹鎮の市に碧湖鎮から、碧湖猪が大量に入ってきた。そのため、子ブタの価格が、1斤あたり4.5元まで下落してしまった。この相場で売れば、70斤で315元でしか売れない。購入費用と飼料代をあわせただけで316元にのぼるのに、このままいけば赤字になるかもしれないと、L.Z.氏は危惧しているところである。彼は、初めて市場経済の難しさに直面しているのである。

6. おわりに—「意味ある停滞」か「意味なき進歩」か

以上、シヨ人を主体に構成される麗水市老竹鎮黄桂行政村における家禽・家畜飼育の意味とその変容、すなわち、家禽・家畜飼育の伝統と現代の狭間で生起する人間の生活戦略と、それに対する意味づけを考察してきた。それは、市場経済の影響を受けつつも、一方向的な現代化の流れに単純にのみこまれ、変革されているわけではない。黄桂行政村の人々は、経済の伝統と現代の狭間でさまざまな模索をいまだ繰り返しており、とくに現代に特化した状況にはなっていない。黄桂行政村における経済の現代化は着実に進展しつつあることが統計上理解できるが、家禽・家畜飼育に関してはいまだ前代の技術、知識が大きな意味をもっているのである。江南地域の大都市周辺農村経済が、現代的商品経済の浸透により大きく変貌しているという一般的な状況と比べ、まだそれへの対応はあくまで相対的にはあるが、緩やかであるといえる。現状として、現代化に対する欲求が高まりつつある過程であり、そこには伝統的な世界から完全に離脱できない状況がいまだ存在しているとみるべきである。

ここでいう伝統とは、シヨ人の生活様式が、「解放」前からすでに大きく変容された後に形成されたものである。その伝承性を保持した人々は、伝統の名にいささかの価値もおいていない。伝統自体には、別に民族的なアイデンティティーを求めるような価値はないのであって、それに価値があるのは、実践して人々の生活の全体性において豊かにする役割をいまだ果たしているからである。労働力や資本、コストといった側面から、大きすぎなければ、

小さすぎもない活動なのである。さらに、金銭的価値とは別の位相の価値をその活動にはみだしているのである。その点において伝統は、「意味ある停滞」として考えられている。それは、経済が大きくなるとうとしている今、変質する可能性がある。その可能性がL.B.氏、L.Z.氏など若い人々のなかに萌芽している経営戦略なのである。

しかしこの経営戦略が、黄桂行政村では、根本的な技術変化、改良、革新をめざしたものではないことを指摘しておかねばならない。たとえば、L.Z.氏がブタの繁殖に完全に特化した点は、現代化への適応戦略であると評価できるが、彼の行なっている繁殖生産は、技術的には根本的、本格的な改良を行っていない。むしろ、飼育技術ではなく、販売の回転をよくする飼育形態、システムの改良に彼は関心をもっているのである。L.B.氏のニワトリ飼育における販売の回転性に関する指向は、さらに顕著である。つまりこの両者は、現代への適応にあたって、農学的な適応ではなく、経済学的な適応をより重視しているといつてよいであろう。

L.Z.氏が97年にやり始めた子ブタ購入肥育一子ブタ販売では、ふつうの人々がやらないような投資をして、その拡大に努めた。しかし、それは売却時の値動きのリスクを、従来の方法より強く受ける方法であった。そのため、彼は現状として値動きに敏感になり、市場経済の動向が第一の関心事となったのである。これは伝承的なブタ飼育を行ってきた農民たちが、ブタの健康に敏感であり、ブタの発育、成長こそが第一の関心事であったこととは大きく異なっているのである。同様にL.B.氏のニワトリをみるまなざしは、そこに存在するニワトリそのものに向けられているのではなく、その背後に想起される金銭に向けられているといつても過言ではない。彼もまた、ニワトリそのものの成長の具合より、それが売られる際の値段の高低に関心があるのである。

ニワトリなどの家禽、ブタなどの家畜を商品としてみる見方は、彼らが語る過去からあった。また現在、伝統的と自負する伝承的飼育を行なう人々も、やはりこの見方からある程度は逃れられない。しかし現在、もっとも新しい方法として認識されている飼育形態は、この見方に極端に集中している点で、

伝承的飼育を行なう人々の見方とは異なっている。もともと、家禽・家畜飼育は農耕の余剰かつ残滓を用い、それを有効に資源化する方策であった。そのため、あくまで経済的に余剰であって、これが主たる本業になることは、多くはなかった。それが特化したとき、高リスクの不安定性を抱えこんだ「意味なき進歩」と化す危険性ははらんでいる。

今後、伝統が「意味ある停滞」として存続するのか、あるいは消え去るのか、現代化が「意味なき進歩」の危険性を克服して人々の幸福に寄与するのか、あるいは農村を荒廃させるのか、といった観点から、「改革・開放」以後の中国農村社会をとらえなおすことが必要であろう。

文 献

- 福田アジオ. 1999. 「調査の経過と調査地の概況」, 『環東シナ海(東海)農耕文化の民俗学的研究』(福田アジオ編), 1-7, 横浜, 神奈川大学外国語学部.
- 藍万清. 1995. 「試論畚族文化変遷」, 『畚族歴史与文化』(施聯朱・雷文先編), 59-70, 北京, 中央民族大学出版社.
- 瀬川昌久. 1990. 「畚族と客家」, 『文化人類学8』(末成道夫編), 74-85, 京都, アカデミア出版会.
- 施聯朱. 1988. 『畚族』北京, 民族出版社.
- 矢放昭文. 1999. 「黄桂村畚語について」, 『環東シナ海(東海)農耕文化の民俗学的研究』(福田アジオ編), 213-220, 横浜, 神奈川大学外国語学部.
- 鐘中. 1987. 「解放前畚族原始社会残余初探」, 『畚族研究論文集』(施聯朱編), 266-277, 北京, 民族出版社.

阿 拉 騰 (Alta)
北海道大学大学院文学研究科博士課程修了

池谷 和信 (いけや かずのぶ)
国立民族学博物館民族社会研究部助教授

煎本 孝 (いりもと たかし)
北海道大学大学院文学研究科教授, 国立民族学博物館併任教授

汪 立珍 (Wang Lizhen)
中国北京中央民族大学助教授

風間伸次郎 (かざま しんじろう)
東京外国語大学外国語学部助教授

岸上 伸啓 (きしがみ のぶひろ)
国立民族学博物館先端民族学研究部助教授

呉人 恵 (くれびと めぐみ)
富山大学人文学部助教授

佐々木史郎 (ささき しろろう)
国立民族学博物館民族学研究開発センター助教授

佐々木 亨 (ささき とおる)
北海道大学大学院文学研究科助教授

菅 豊 (すが ゆたか)
東京大学東洋文化研究所助教授

ロレーナ・ステンダルディ (Lorena Stendardi)
元北海道大学国費研究留学生

D.O. 朝 克 (D. O. Chaoke)
中国社会科学院教授

津曲 敏郎 (つまがり としろう)
北海道大学大学院文学研究科教授

V.V. ポドマスキ (V.V. Podmaskin)
ロシア科学アカデミー

山田 孝子 (やまだ たかこ)
京都大学総合人間学部教授

煎本 孝 (いりもと たかし)
1947年 神戸市に生まれる
東京大学大学院理学系研究科修了, Ph. D. (哲学博士)
(カナダ サイモン・フレージャー大学大学院)

現 在 北海道大学大学院文学研究科教授, 国立民族学博物館併任教授 文化人類学・生態人類学・自然誌専攻

著 書 *Chipewyan Ecology* (Senri Ethnological Studies 18, National Museum of Ethnology, 1981), 『カナダ・インディアンの世界から』(福音館書店, 1983), *Ainu Bibliography* (Hokkaido University, 1991), 『文化の自然誌』(東京大学出版会, 1996)

編著書 *Circumpolar Religion and Ecology: An Anthropology of the North* (Co-ed., University of Tokyo Press, 1994), *Circumpolar Animism and Shamanism* (Co-ed., Hokkaido University Press, 1997)

東北アジア諸民族の文化動態

2002年2月25日 第1刷発行

編著者 煎本 孝
発行者 佐伯 浩

発行所 北海道大学図書刊行会

札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内(〒060-0809)
Tel. 011(747)2308・Fax. 011(736)8605・http://www.hup.gr.jp/

アイワード/石田製本

©2002 煎本 孝

ISBN 4-8329-6241-8